

深谷はばたき支援学校訪問記

渋谷区立代々木ポニー公園
深野 聡



馬小屋と放牧スペース

馬の取り扱いに関する研修でポニー公園にいらしている小松文先生らが管理されるポニーの「メロン」に会いに、埼玉県深谷はばたき特別支援学校を初めて訪問しました。

馬小屋は校庭西端の、遊具がそろった芝生の広場に設置されていました。木造の小屋から放牧スペースに自由に行き来できるので、ポニー1頭の飼育には十分な広さです。また屋根をかけた部分や木立の中に入っていける工夫もしてあるので、日中は遊具で遊ぶ子供供達を眺めながら、メロンがのんびりと過ごす様子がうかがえました。

今回の目的は、「体温が計れない」、「ブラシをかける時にじっとしない」、「脚の裏握りをさせない」、「調馬索で運動させようとしても走ろうとしない」といった問題点があるのでそれらを改善したい、ということでした。これらを聞いた限り、恐らくメロンは人との付き合い方、人からの指示への対応の仕方が理解できていないのでは、ということが予想されました。



馬小屋の様子

「出会い」から「関係をつくる」へ

実際にメロンに会ってみると、小柄な可愛らしい牝のポニーです。そばに寄っても落ち着いた様子なので、頸に愛撫をして彼女に挨拶してから、馬体をいろいろとさわってみました。腹下や内股など敏感な部分をさわると耳をふせる(怒ったり、警戒している)様子がありましたが、基本的には大人しいです。

どうにかなるかな?という手ごたえを感じましたので、普段運動しているという校庭の鉄棒前のスペースへと移動しました。早速メロンを鉄棒に繋ぎ、前脚を持ち上げる動作をしてみました。確かに上げようとする動きを最初は見せませんでしたでしたが、球座下のつなぎの部分をしっかり握り、「この脚をあげたい」というイメージを強く持って動作すればすっと上げました。その後それを繰り返して実施するうち、抵抗なく持ち上げられるようになり先生方にもも上げていただけるようになりました。ブラッシングについては、片手にブラシを持ち、反対の手で馬体をさわつつ、声をかけながら実施すればさほど問題なく実施できました。

体温を計測する

続いて、馬の健康チェックに欠かせない体温計測に挑戦です。まず尾根のところを左手で強く握り、しっぽだけを持ち上げます。うるさい馬や警戒心が強い馬はなかなか上げさせませんが、メロンは抵抗したものの、小柄なポニーですから力を入れれば上げさせてくれました。この様子を確認し、右手の体温計を肛門に挿しこんでみます。挿したとたんメロンは腰の上に浮かせ、後ろ脚を蹴り上げようとする気が私の左腕を通じて感じられました。しかし、そこに私の体重をかけて腰を浮き上がらせないようにします。そんなやりとりをメロンとしながら、折り合いがついたところで、さらに体温計を挿し、無事に体温を計ることに成功しました。この動作も数回繰り返して行くうちに、メロンが尻尾を持ち上げられること、体温計を挿しこまれることが理解できたようで、抵抗感が薄れてきたので小松先生をはじめ他の先生にもやってみていただきました。

指示そして調馬索での運動

最後に運動です。調馬索をさせたいとの要望でしたが、その前に引き馬で発進、停止の動作を繰り返して様子を見ます。発進の合図に反応しなかったり、止まっていたり勝手に前に出ようとしています。メロンが自分勝手に動いているので、これでは人につきあうポニーとしては問題です。そこで私の合図で発進、停止をさせるようにし、従わない時には声や引き綱を通じてメロンに注意、懲戒を与えるようにします。左手にもった鞭を見せたり、メロンの後脚にあてながら根気よく私からの動きかけを繰り返しました。やがてメロンは、私の指示を理解し、発進、停止がスムーズにできるようになりました。

彼女が私のことを受け入れる様子が感じられたので、左手前での調馬索を試みました。しかし、まったくできません。私から離れようとしていないのと、手や鞭を外に出て歩くよう促してもかえって、左肩を私の方に寄せてきてしまうのです。メロンにより強く声や鞭を用いて私から離れるよう指示を与えると、今度は自分の小屋に向かってターッと走りだして、その場から逃げだします。メロンにとって一番安心できるのが小屋なのでそこに帰りがっているのです。何の仕切りもない校庭ですから、力いっぱい逃げようとするメロンを引き止めるのは大変でした。体勢を整えて何度も繰り返したところ、1m位離れて私の周りを歩きそうな気配が見られましたが、より前進氣勢を与えて速歩をさせようとするやほりターッとなくなってしまいます。

私達の様子を見た小松先生が右手前の方がいいかも、と仰ったので左右を入れ替えたところ、最初から速歩の調馬索ができました。常歩、速歩を繰り返しながらしばらく運動を続けたところ、左後脚の動きが気になりました。脚を少し外に振りながら走っているのです。調馬索をやめ、真っ直ぐ歩かせて速歩を見ましたが、やはり腰の動きが少し気になります。脚を外に振り出して歩く癖ならば、それが回転の内側にくる左手前だとうまく振れないので、それを嫌がってできなかった可能性もあると思えました。私とメロンの関わりも既に90分以上経ち、右手前は上手に周って運動したので、今回はここまでと判断、彼女が今回成長できたことを十分に褒め、小屋に連れて帰りました。

おわりに

放牧スペースで静かにたたくメロンを眺めながら、小松先生や職員の方々に、馬に指示を出す時はシンプルで分かり易く、出来たら褒め、出来ない時はその理由を考える、常に馬の心理を考えて人が動きかけるといったポイントを説明しました。メロンとの短時間の関わりでしたが、その中で彼女は、何を求められているのかを感じ取ろうとする姿勢が見えました。周囲の人をよく観察しており、大人しい性格でしたので、今後小松先生をはじめ職員の皆さんの訓練によってメロンがより成長し、子どもたちとの活動が広がっていくことを期待しています。

ドイツ乗馬(施設)レポート

[第3回] ~ドイツ治療的乗馬協会・資格制度について~

在・ドイツNRW州
佐久川 未来

＜経歴＞東京都立川市生まれ/日本獣医畜産大学 畜産学科(現・日本獣生命科学大学) ヤマハつま恋乗馬クラブ勤務/ドイツ国際平和村にて1年間の研修 LVR Fachschule des Sozialwesens卒/Heilerziehungspflegerin(障害児者教育・介護士)の資格取得 デュッセルドルフの特別支援学校にて、インテグレーションヘルパーとして勤務 ドイツ馬術連盟公認乗馬トレーナー資格を取得/ドイツ治療的乗馬協会の研修プログラムに参加予定



ライオンランド州立乗馬・馬車学校HPから

ドイツ乗馬(施設)レポート第1回・2回と、馬大国ドイツの一般的な乗馬事情をご紹介してきましたが、今回の第3回からは、いよいよ“Therapeutisches Reiten(治療的乗馬)”をテーマにレポートしていきたいと思います。

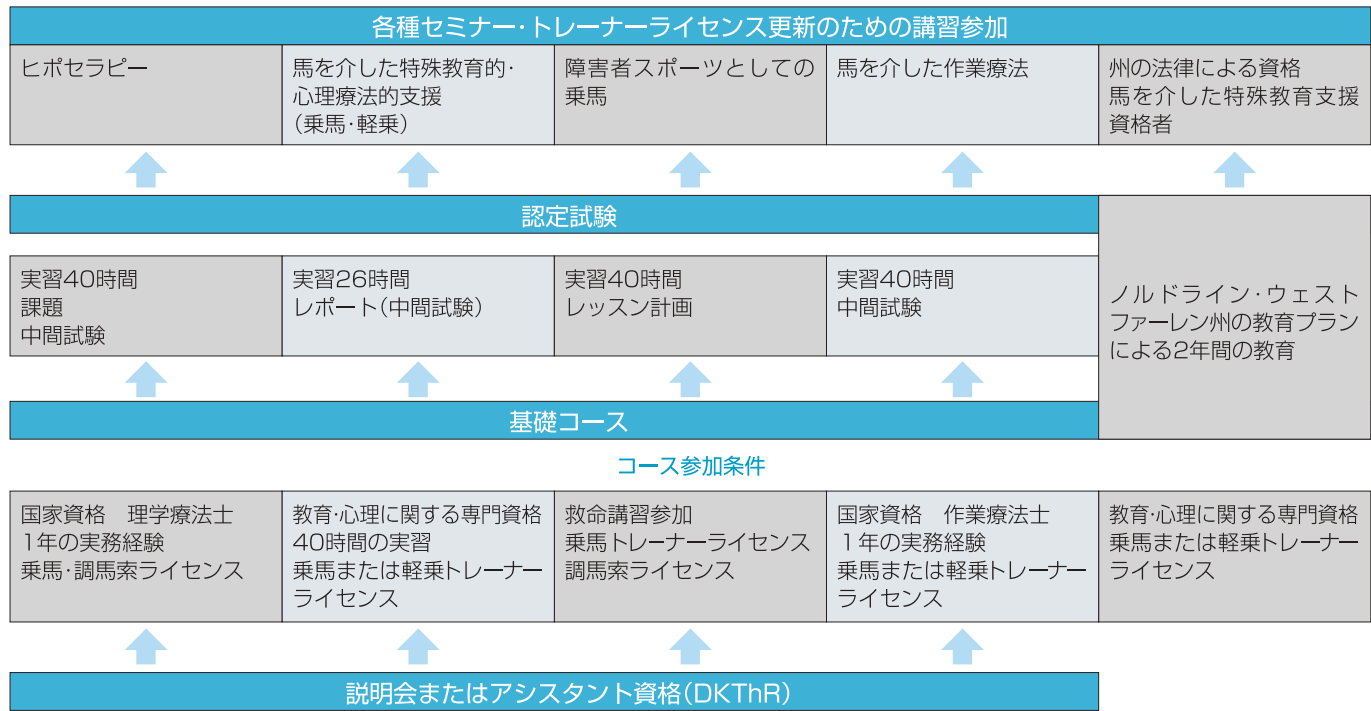
ドイツ国内で“Therapeutisches Reiten(治療的乗馬)”と一言に言っても、それぞれ特徴や趣旨の異なる様々な団体が活動しています。もともとドイツで結成されたDKThR[®]とFKThR[®]などの協会の方針に基づく活動が主ですが、スイス・オーストリア・オランダといった近隣諸国[®]で資格を取得したドイツ人が自国で治療的乗馬を行うというケースも少なくありません。ヨーロッパにおける治療的乗馬の専門家育成の基準づくり、団体間の情報交換や質の向上などを目指して、2008年には“Forum der Ausbildungsträger einer Therapie mit dem Pferd(FATP)”という法人がつかられ、上記4カ国(5団体)が加盟しています。

今回は、そのうち40年以上の歴史を持ち3,850人もの専門家を有するドイツ生まれの協会“DKThR”の資格制度に注目してお話していきます。

*1 Deutsches Kuratorium für Therapeutisches Reiten e.V.
*2 Förderkreis Therapeutisches Reiten e.V.
*3 スイス、オーストリア、オランダの治療的乗馬は、もともとドイツの活動を基盤として発展

資格取得プログラムの流れ 2012/2013

(DKThR Weiterbildungsbroschüre 2012/2013参照)



＜ホームページ＞●FATP <http://www.forum-atp.eu/> ●DKThR <http://www.dkthr.de/> ●FKThR <http://www.foerderkreis-therapeutisches-reiten.de/>

【解説】ドイツにおける馬をパートナーにした人への対応

滝坂信一(本会理事長)

「ドイツ乗馬(施設)レポート[第3回]」について、いくつかの内容に少し解説を加えたいと思います。

「治療的乗馬」という領域

ドイツ治療的乗馬協会の示す「治療的乗馬」の領域を少し説明しておきましょう。図は、同協会がこの領域について説明しているダイアグラムです。ドイツ語圏において<ヒポセラピー>は、乗馬によって行なわれる理学療法のみを指します。なお、合衆国・カナダ・オーストラリアの場合は、馬を用いて行なわれる理学療法、作業療法そして言語療法(Speech and Language therapy)をヒポセラピーと規定しています。

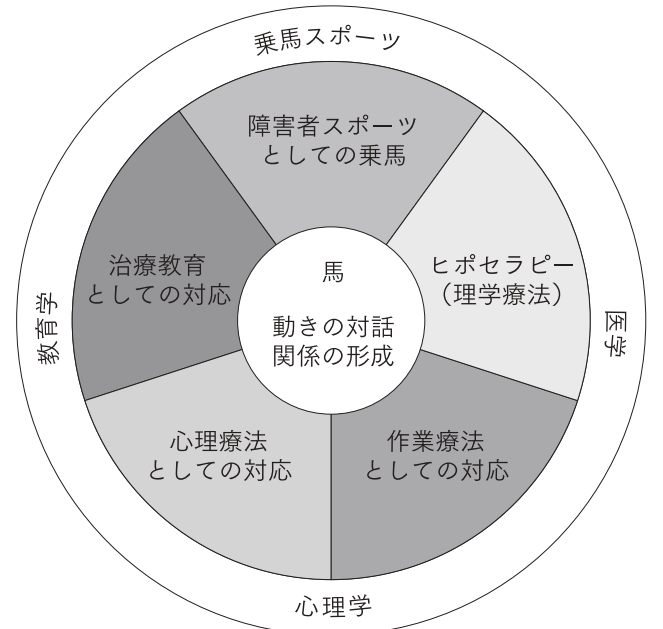


図 治療的乗馬の領域

[Deutsches Kuratorium für Therapeutisches Reiten e.V.,2009より] ドイツ語圏では医療のほかでも理学療法における乗馬の活用に限ってヒポセラピーと呼ぶ(Hippolはギリシャ語で「馬」を意味する)。(滝坂信一、バイオセラピー学入門、p.232、講談社(2012))から

「治療的乗馬」という訳について

この領域を英語でtherapeutic riding、ドイツ語でtherapeutisches Reitenと標記します。標記のうちtherapeutic、therapeutischesの部分をもとに日本語に訳すかは、実はそんなに単純なことではありません。本協会では、「治療的」と訳し会の名称にも用いています。therapyを用いる領域の代表例として、physical therapyやoccupational therapyがあり、それぞれ理学療法、作業療法と訳されます。そして、これらに携わる専門家はphysical therapist(OT)理学療法士、occupational therapist(PT)作業療法士と呼ばれ、いずれも国家資格による医療専門職です。このことから、therapyという表現はこの領域が医療の1分野であると誤解されてしまう可能性があります。しかし、先の図からもわかるように、この領域は医療、教育、心理そしてスポーツの分野から成るもので、「治療」ということばを使う場合、丁寧な補足説明が必要であると考えています。

「特殊教育」について

ドイツにおいて障害のある子どもの教育における馬の活用の分野をHeilpädagogisches Voltigieren/Reitenと呼びます。このうち、heilpädagogischesという語を何と訳すかもまた、なかなか容易ではありません。ドイツの関係者たちは、これを英語に訳す際 remedial educationにおける乗馬や軽乗という言い方をしますが、remedialは日本語の「補習の」「改善の」「是正する」「教育的な」という意味に該当し、「一定の水準に達していない生徒に対して行われる教育」という意味で「治療教育」と訳されます。ドイツの大学の学科名にも多くのこの標記が使われてきたのですが、ドイツにおいて英訳される場合こちらはspecial educationが使われます。これは、日本で言う「特殊教育」、障害のある子どもに対する教育を指します。左の図では「治療教育」、今回の佐久川さんの原稿では「特殊教育」と訳していただいています。



ヒポセラピー(Zentrum für Therapeutisches Reiten e.V.の実践から)

ドイツという国の仕組みと制度

今回の内容で、「2009年からノルドラインヴェストファーレン州文科省の教育制度に沿った資格取得コース(2年間)が新たに設けられました」との記述があります。これを、どのような資格と呼ぶかについては難しいところですが、それは、ドイツが連邦国家であり、日本と国の仕組みが大きく異なっていることから由来しています。防衛や国家経済など国家にかかわる大枠については連邦法で定められますが、他は各州が独自に法律を決めるという仕組みになっているからです。教育の分野を例にとると、年に数回開かれる州の文部大臣が集まる会議があり、そこで各州の取り組みについての情報交換が行われます。例えば、20年程前のことですが州によって義務教育の年限が異なっていました。佐久川さんが今回取り上げている馬を用いた特殊教育的支援を職業教育に位置づけ専門性を認定する制度は、NRW州が作ったもので、ドイツ国内で初めての制度です。日本の制度でいうとほぼ国家資格に該当するものと考えてよいと思います。



特殊教育的乗馬(Zentrum für Therapeutisches Reiten e.V.の実践から)